

平成25年度（第35回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 平成25年9月28日(土)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部

はじめに

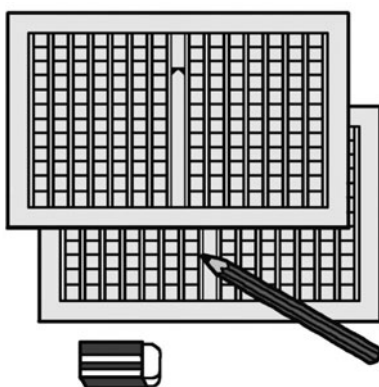
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で三十五回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の青少年健全育成推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様にお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



もくじ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

国際交流から学んだ心

能美市立辰口中学校 三年 北本 紫乃…………… 3

優秀賞

「身障」と言わないで

野々市市立野々市中学校 二年 小林真理子…………… 4

助け合い・支え合い

加賀市立東和中学校 三年 米口 悠生…………… 5

奨励賞

大切な命

白山市立笠間中学校 二年 番下 輝也…………… 6

「言葉」というもの

加賀市立片山津中学校 三年 河崎 聖怜…………… 7

「言う」と「言わない」の間で

七尾市立田鶴浜中学校 三年 森田 美悠…………… 8

「アナタは新聞を読んでいますか」

石川県立金沢錦丘中学校 三年 樋田みち瑠…………… 9

今を大切に生きたい

白山市立鳥越中学校 三年 中西 夏菜…………… 10

生きていくために

七尾市立御祓中学校 三年 安原 菜夏…………… 11

「生徒会長になって」

穴水町立穴水中学校 三年 米田 琴海…………… 12

『あたり前』にありがとう

金沢市立小将町中学校 三年 上田 瑠珠…………… 13

偶然がくれた宝物

七尾市立御祓中学校 三年 田畑 佳穂…………… 14

農業テクノロジー

かほく市立宇ノ気中学校 三年 森 幹太…………… 15

言葉と向き合う

金沢市立鳴和中学校 三年 宮本 由季…………… 16

祖父の残してくれたもの（伝統を受け継ぐことの大切さ）

加賀市立山代中学校 三年 空 達也…………… 17

「差別」に思う

金沢市立清泉中学校 三年 中田亜莉紗…………… 18

（優秀賞、奨励賞は発表順に掲載）

◎審査員講評…………… 19

石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事 中田 一宏

◎少年の主張石川県大会概要…………… 20

◎石川県大会審査基準…………… 21

◎地区大会概要…………… 22

◎平成25年度少年の主張全国大会

（私の主張2013） 内閣総理大臣賞受賞作品…………… 26



「なんでロシアなんて行くの？怖くないの？」
という友達の言葉に対して、私はむしろ、
「なんで行きたいと思わないの？」
と疑問に感じました。

私は中学二年の夏、能美市の姉妹都市であるロシア・シエレホフ市
へ少年使節団として行ってきました。

出発前、外国へ行くことがうらやましいという人も多くいる中で、
否定的な意見を口にする人もいました。私は、みんなが外国に興味を
持っていると思っていたので、そのように感じている人が多いことにショッ
クを受けました。そして、今回の国際交流でロシアの人たちは私たち
のことをどのように思っているのだろうか？と不安にもなりました。

期待と不安の両方を抱いて、ロシアに向かいました。しかし、不安
があったことも忘れるくらいのロシアの人たちの温かさに驚きました。
ロシアの子供たちはとても積極的で、私たちを見て、「コンニチワ！」
と笑顔で手を振ってきました。きつと日本人だったら、ロシア語で
「コンニチワ」が何て言うのかも知らないだろうし、話しかけること
もできないと思います。また、シエレホフ市の人たちは能美市が姉妹
都市であることを当たり前のように知っていました。この交流事業を
始めた森茂喜さんへの尊敬の気持ちも強く、私が想像していたよりも
はるかに日本を愛してくれている人が多かったです。私自身、使節団
としてロシアへ行くまでは、正直、ロシアのことについて全く知りま
せんでした。このような経験から、ロシアの子供たちは、他の国に目
を向けることができている、すごいと思いました。

この国際交流の中で私が一番に学んだことは、「自分で努力しない
と道は開けない」ということです。日本とロシアでたくさんの人たち
と交流してきましたが、言語の違いからなかなか積極的になれてい
ない人がいました。私は、伝わらないながらもジェスチャーと英語と、
知っているロシア語で会話をしました。それは簡単なことではありません
ですが、努力のかけもあって、すぐに私のことを覚えてくれたし、向

こうからもたくさん話しかけてくれました。そのことがとても嬉しかっ
たことを覚えています。

外国に対して否定的な意見を持っている人たちは、日本への愛が強
いとともに、日本人特有の奥ゆかしさからか、積極的に交流すること
ができない人が多いのだと思います。日本を愛する気持ちの強さや、
日本人の特長である奥ゆかしさは、昔から受け継がれてきたことだか
ら仕方のないことなのかもしれません。しかし私は、もっと日本以外
の国に興味を持つてほしいです。興味をもつことで、今までになかっ
た新しい発見があつて楽しいと思うし、これまでになかった自分の変
化から積極的な心も生まれれると思います。ただ、興味を持つだけで動
かないのはもったいないことです。時には、一歩ふみ出す勇氣も必要
になってきます。

私は誰よりも努力したと思うから、自分に自信を持つことができま
した。そして、今ではかけがえのないロシアの友だちを作ることがで
きました。

今の私の夢は、より多くの日本人にもっと世界を知ってもらうこと
です。そして、日本に興味を持つている外国人の手助けもしていきたく
いです。まずは大学生になったら、ジャパンテントの学生ボランティア
をして、たくさんの人に世界を知ってもらおうと思います。また、
二〇二〇年東京オリンピックのボランティアにも参加して、様々な国の選手たちに
日本の良さを伝えたいと思っています。
そのためにも、この国際交流で学んだ、
「自分で努力すること」「自分に自信を持
つこと」の二つを大切に、自らの将
来の道を開いていこうと思います。日本
と世界を結びつけることができますように、
自分から歩み寄る努力を続けていきます。





「お前何言つとるがん？身障やろ！」私のクラスでよく聞く言葉です。皆さんは「身障」という言葉を使ったことがありますか？

「身障者」とは、身体の機能に障害がある「身体障害者」の人のことを言います。この「身障」という言葉を私は毎日のように耳にします。その言葉の裏には障害のある人をさげすむような、馬鹿にするような、そんな心の貧しさを感じます。その言葉を聞く度に笑顔はひきつり、明るく楽しい気持ちは吹き飛んでしまいます。なぜなら、私には七歳離れた知的障害を持つ兄がいるからです。

兄はみんなと同じ生活はできませんが、知能の発達が遅れていて、物事を理解するのに少し時間がかかります。また、兄は耳の聞こえ方が人と違うらしく、花火や雷などの大きな音、車のクラクションが鳴ると必ず耳をふさいでしまいます。しかし、そんな兄にも「障害者」と思えないようなすごい一面もあるのです。例えば、家族と旅行に出かけたのがいつだったか、思い出せないようなとき。兄は「何年何月何日何曜日、へ行った。」としつかり覚えていられるのです。また、「五十年後の私の誕生日は何曜日？」と聞くと、「水曜日」と十秒もかからずに答えてしまいます。その他にも、兄はきれいな好きで洗濯した洋服やタオルをきちんとたたみ、脱いだ靴もきれいにそろえます。ご飯を食べる時はお箸をきちんとそろえ、あいさつをしてから食べ始めます。当たり前前のことですが、礼儀正しい兄を私は尊敬しています。現在、兄は高校を卒業し、社会人となって金沢の会社で働いています。通勤も一人です。誰の手も借りなくても大丈夫です。このように、兄は知的な障害があってもそれをカバーするだけの優れた一面を持っており、私達とあまり変わらない生活を送っているのです。

もう一つ、私にはこんな経験があります。私が小学生だった頃、学校に障害を持った人が数人いました。特に嫌な感じはしませんでした。授業中に教室に入ってくる面白い子がいるなぐらいに思っていました。しかし、ある日、友達が、

「あの子ら授業中に教室に入ってきてすごい邪魔やー。早く特別支援学校に行ってくれんかなー。」

と言いました。私はその時「何で？」と思いましたが、あえて口にし

ませんでした。以前兄のことを話すと、「へえーそんな。お兄ちゃんすごいじ。でも大変やね。」と言われてしまいました。けれど、私はそんな答えを期待していたわけではありません。私はただ、障害を持つ人のことを理解してほしかっただけなのです。

おそらくその友達は、障害者に対して偏見を持っていたのだと思います。私は、これまで兄といてそんなふうには言われたことがありませんでした。だから、この日以降、差別について強く意識するようになりました。

毎日のように聞く「身障」というあの言葉。言っている方は意味も考えずにただふざけて言っているだけなのだと思います。けれども、誰も望んで障害を持って生まれてきたわけではありません。差別してほしい人など一人もいないのです。もし重い障害のせいで私達と同じ生活ができなくても、一人の人間として尊ばれるべきだし、動作や姿、顔の表情だけで差別するのはおかしいことだと気付いてほしい。私達「健常者」にも個性はあり、長所や欠点は沢山あります。そして「健常者」なら、それも当たり前として認め合ったり許し合ったりできるのに、障害があるというだけでどうしてそれが許されないのでしょうか。兄は人より遅れているところが沢山ありますが、それが兄の個性だと私も家族も思っています。

もっと障害を持つ人に関心を持って下さい。テレビや雑誌を通して知ることでもできます。障害があっても私達と同じことを考え、あまり変わらない生活を送っていることがわかると思えます。その人達のことを深く知ることにより、身近に感じられ、「身障」という言葉をふざけて使わなくなるのではないのでしょうか。

暑い夏も毎日仕事をして頑張っていた兄。お給料をもらい、好きな物を買って嬉しそうにしている兄。そんな日常を理解してもらうために、私も黙っていません。もっと周囲に働きかけていこうと思います。





「老老介護」という言葉を知っていますか。文字通り、お年寄りがお年寄りを介護するという意味です。私はこの言葉から、病に陥った祖父と祖父を支え続ける祖母の姿が思い浮かびます。

私の祖父は、元々は明るく元気な人でした。しかし、糖尿病を患い、入院を繰り返すうちにどんどん元気をなくしてしまいました。その後、祖父は内臓にも病気をもち、十三時間にも及ぶ大手術を受け、それ以来、寝たきり状態になってしまいました。

そんな祖父を傍らでずっと支えてきたのは、私の祖母でした。食事の支度や通院の付き添い、何から何までこなし、私達家族に弱みを見せませんでした。そんな祖母の姿は、幼い私にも理解できるくらい、家族のために頑張っていました。やがて私達は祖母に甘え出し、祖父の身の回り全般は全て祖母にまかせっきりになりました。これが、どれだけ祖母の負担になっていたかは、そのときの私達には知る由もありませんでした。ようやく知ることができたのは、祖母が怪我で入院したときでした。このときに私達は、祖母の抱えていた負担と祖母の有難さに気が付きました。

そして、私達家族は、少しでも祖母を支えるため、今まで以上に家族全員が協力してできることを行い、訪問看護も受けるようになりました。私は何を言ってもまだ子供なので、祖父に声を掛けたり、「おやすみ」というときに手を握ったりするくらいしかできませんでした。看護師さんはそれを聞くと少し驚き、それから笑顔で「それが一番効く薬なんだよ。」と教えてくれました。

「寝たきり状態になると、介護する人はもちろん大変だけど、受ける人も本当は辛いんだよ。自分のせいで周りが苦労しているのを見ると申し訳ない気持ちでいっぱいになっちゃうから。そうすると、もうみんなが自分を相手にしなくなるんじゃないかって思えてきて、ますます鬱になってしまふ。そんな人を今まで何回か見てきて、でも、そんなときに手を握って目線を合わせて話してくれるとすごく嬉しいんだよ。」

と看護師さんは訴えるように言い、「やっぱり大家族っていいね。」と嬉しそうに付け加えました。

私はこの言葉から、あることに気が付きました。それは、介護というの、する人だけでなく、介護する人を支える人が近くにいると成り立つものだということです。もし、そんな人が誰もいないと、待っているのは「老老介護」という過酷な道です。そこへ向かわないためには、家族みんなで暮らすことが重要だと思います。もしも誰かが倒れても、家族のうち誰かが気付いてくれるからです。どうしても家族と住めない時は、地域の人が協力して助け合うことができれば、それぞれにかかる負担も軽減すると思います。つまり、一人が負担するのではなく、多くの人数で負担するような仕組みを作ることが大切です。それができれば、する側も受ける側も苦痛のない安定した介護が実現するはずです。実際に私は、この目でそれを確認することができました。

今、私の祖父は、近所を散歩できるほどにまで回復し、祖母も今の状態にとっても満足しています。良い環境は、良い介護、良い経過を生む、そう確信した瞬間でした。

私はこれからも、祖母を支え、祖父を手助けしていきます。皆さんの周りに、介護を受けている人はいませんか。もし見かけたら、介護している人、介護を受けている人にやさしく笑顔で声をかけてあげてください。その行動自体は小さなものですが、きつとそれは、そんな人にとって、一番の心の支えになると思います。





母のことを思うといつもあの光景が頭に浮かぶ。母の遺体を見つめ僕が泣きながら悲しんでいる光景。母の遺体を火葬し、骨壺に入れる光景。他にもたくさん光景が頭に浮かぶ。そのどれもが僕にとって悲しい光景であると同時に、決して忘れることのない母との大切な思い出でもあります。

僕には母親がいません。僕が五歳の時に膠原病からくる合併症にかかり天国へ旅立ちました。まだ幼かった僕には、「死ぬ」という言葉の意味がうまく理解できず、自分の前からお母さんが消えたと、ただひたすら悲しむだけでした。母が天国へ旅立つてから二年の月日が過ぎた頃、自分の生まれ育った故郷、金沢市から引越して、白山市へやってきました。何気なく日々を過ごしていく中で、父と兄、祖父母と暮らす生活が僕にとってのごく普通の日常になっていきました。そんな小学校六年生のころ、道徳で「母への思い」という作文を書く時間がありました。そのとき僕は、母との記憶を思い出し、あらためて母の死と向き合い、やっと気づくことができたのです。自分は母の死をどのように受け止め、これから何をしていくべきかということに。それまで漠然と考えていたことが自分の中でつながったことに感動しました。母の死を無駄にせず、母の分まで生きて、命の大切さを一人でも多くの人に伝えること。それが、母の死に対する僕なりの答えです。

中学生になった今も、天国の母から学んだ「命」に対しての思いを大切にしています。母の死から早くも九年がたち、僕は中学校の中心となる二年生になりました。部活動ではバレーボール部に所属しています。最近では奈良遠征に参加しました。二泊目の夜、僕は布団にもぐり家族について友達と話していました。「もしお母さんや家族の人が誘拐されたらどうする？助けに行く？」と何気なく尋ねてみると、友達はある「助けに行かない」と言いました。そのとき彼が本気で言ったのかは分かりませんが、その言葉に怒った僕は「大切な人を亡くしたことはないやつが何をいってるんだ」と強く言いすぎてしまい、友達にいやな思いをさせてしまったのです。僕は後悔しました。

母から気づかされて思ったことは、命の大切さを一人でも多くの人に伝えることです。しかし、それは、感情的に押し付けるものではなく、しっかりと相手が納得できるように伝えていかなければいけません。その後、その友達に謝りました。彼は「うん、まあ、いいよ。俺も悪かったし。そう簡単に命に関わることを言ったらダメだね。」と言って許してくれたのです。そのときはとても驚きました。怒って友達にいやな思いをさせてしまったのは僕なのに、自分も悪かったと言って僕のことは何もいわなかったからです。それと、僕の伝えなかった命の大切さが伝わっていたからです。そのとき僕は思いました。身近な一人の人に命の大切さをつたえることができました。

最近日本では、自殺をする若者が増えています。この行為は命に対して無自覚なのです。命は親からもらった世界に一つだけのもので失えば、その人のことを大切に思う人が悲しみます。だから命は大切なのです。僕は母の死を通して、命について考える機会をもらいその大切さを知ることができました。もし今よりもっと多くの人が命について考え、理解することが出来れば、自らの命を大切に、社会は今以上に明るく、よくなると思います。そのために、一人でも多くの人に命の大切さを伝え、命について考える機会をもってもらいたいです。

あなたも一度、真剣に考えてみませんか。一つの大切な命について。





最近、「死ね」という言葉を言っている人が多いようです。私のまわりでも、よく耳にします。その言葉は、仲の良い友達にも言っています。話の内容を聞いてみると、少し自分が気に入らないことがあると、その言葉を使っていました。言っている人は、「死ね」という言葉が普通になってきているのかもしれませんが。こういう現状はひどいと思います。先生たちが注意すると、すぐ「うざ」と言います。私は、その時は何も言うことができませぬ。なぜかという、友達の関係が悪くなると思うからです。先生たちは注意し合いなさいと言いますが、それができないのが現状だと思います。

私も「死ね」「バカ」「アホ」と言われたことがあるし、逆に言ったこともあります。私が言われた時は、少し傷つきました。しかし、悪気があって言ったわけではありません。仲が良いから言えるのかもしれませんが。でも、言葉は人の受け方によって傷つき方が違うと思います。私が軽い気持ちで言ったつもりが、相手にしたら深く傷ついているかもしれない。だから、悪気がなくても自分が言われて嫌な言葉は絶対に言っではいけないと思います。私も傷ついたことがあります。仲の良い友達とふざけ合っていたので、相手にしたら軽い気持ちで言ったのかもしれませんが、私は傷つきました。

もし、自分が言われた言葉で嫌だった言葉は、次から言葉を選んで話せばいいと思います。話している時に言葉を選ぶのは難しいと思うので、普段から気をつけたいと思います。これを一人ひとりが気をつければ、傷つく人が減ると思います。

嫌な言葉の逆はうれしい言葉です。私が言われて一番うれしかった言葉は「ありがとう」です。他にも「頑張れ」「自分のペースでやればいい」などもいわれてうれしいです。人が困っている時は、助け合わなければいけないと思います。人と人が助け合っていけば、互いに良い思いをします。隣の席の人が物を落とし、拾ってあげたことがあります。拾った後、相手から「ありがとう」と言われました。その時、とても良い気持ちになりました。逆の立場だったら拾ってくれて

うれしい気持ちになると思います。他にもうれしい気持ちになったことがあります。それは、中学最後の水泳の大会の時です。私が緊張して、自分の出番を待っている時、チームメイトが「この日のために練習してきたから大丈夫やよ」と言ってくれました。私は、今までにないくらいうれしかったです。そして、今でも心に残っています。私は、この言葉ですごく自信が付き、良い泳ぎをすることができました。私も、チームメイトに「頑張れ」と言いました。うれしい言葉は、互いに助け合って生まれる言葉だと思います。

嫌な言葉とうれしい言葉、私はうれしい言葉の方が好きです。理由は、人を幸せにするし、良い気持ちになると思うからです。嫌な言葉が好きという人は、今の気持ちを変えなければいけないと思います。嫌な言葉を言われてうれしい人がいるとは思いません。

「言葉」には人を幸せにする言葉と人を不幸にする言葉の二種類あると思います。「死ね」という言葉は、人を不幸にする言葉です。今この言葉を使っている人は、人を不幸にしています。私は、自分が言われてうれしかった言葉、言われてうれしいと思う言葉をたくさんの人に、たくさん言ってあげたいと思いました。





「やっぱり、おかしいんじゃない。自分が心にもないことを口にするのって…。」

現在、私は田鶴浜中の吹奏楽部の一員となつて二年目になります。初めの頃は、仲間になるために、相手に本音を伝えることが十分ではありませんでした。もし言ったりしたら、相手との関係が悪くなるのが怖かったです。だから、勇気が出なかつたのです。

しかし、去年のコンクールの結果が、私の目標にしていた色とは違つていて、納得のいかない日々が続きました。

そんなある日、ミーティングが開かれました。議題は「今後の部活動の方針について」です。そのミーティングでは、皆が本音で話をしなくてはなりません。そして、私の話す番になつた時に、百パーセント自分の思いを伝えることができませんでした。その時の私の胸には、どこかうしろめたい気持ちが残っていました。

すると、講師の先生が、
「それ、本音？」

その言葉を聞いた瞬間、私の心を見透かされたようで、胸の鼓動がどんどん大きくなっていきました。と同時に、周りの反応が気になつて仕方がありませんでした。

その日、家に帰ってからもずっと、講師の先生から言われた本音という言葉が、頭から離れませんでした。そんな様子をみていた母が、
「どうしたん？なんか暗いぜ。」

その母の言葉を聞いて、自分の思っていること全てを、打ち明けてみました。すると、どんどん心が軽くなっていき、言えなかつた本音を友達に言ってみよう、という気になりました。その時の私の心はとてもしっかりした気持ちでいっぱいになりました。

次の日、勇気を出して本音をメンバーに伝えてみました。

「ここ、もつとこうした方がいいんじゃないかな。」

と、アドバイスしたところ、

「ああ、そっか。」

と私の意見を受け入れてくれました。ところが、メンバーの一人が、
「でも、私はこうした方が良いと思うけどな。」と反論しました。その言葉を聞いて、言わなければよかつたと、少し心が揺れ始めました。すると、反論したメンバーが、

「じゃあ、両方やってどっちが曲に合ってるか、やってみよう。」

という言葉で、今まで何を恐れていたんだらうと、言わなかつた自分が恥ずかしくなりました。

それからというもの私はできる限り本音で話すようにしています。

例えば、授業中の発言を増やすようにすること、自主的な行動をすること。前までの私なら、「誰かがやってくれる。」「発表して失敗でもしたら。」とやはり、消極的な考え方しかできませんでした。

でも、今の私は違います。自分なりにできることをしようと努力しています。あれ以来本音をぶつけたが為に、相手と衝突することもありました。それでも、前の本音を言わない私より、ずっと私らしいと思っています。

自分の本心を言えずに、悩んでいる人はいませんか。以前の私のように…。確かに、相手にはつきりと物を言うのは難しいです。少し間違えれば、相手との間に溝ができる可能性もあります。でも、だからといって相手と向き合わずに終わって良いのでしょうか。後悔しませんか？勇気を出して言ってみればきつと相手も受け止めてくれるはずですよ。

だからこそ、言わないよりも、言ってみたらどうですか？自分の本音を言ってみませんか？



奨励賞 「アナタは新聞を読んでいますか？」

石川県立金沢錦丘中学校 三年 樋田 みち瑠



「アナタは新聞を読んでいますか？」

そう聞かれて素直に「はい」と答える中学生は多くないと思います。少なくとも私は、最近新聞を読み始めたといっても過言ではありません。中学三年生の国語科の授業で新聞記事を活用して学習する機会がありました。普段新聞を読み慣れていなかった私はとても苦労しました。私の家で新聞をとりはじめたのはごく最近です。今まで新聞といったら特に必要のないものでした。書写の練習に使ったくらいです。家族の中で読むのはいつも父か母だけでした。だから私たちに新聞は必要なのかと疑問を感じていました。

ある日、祖父の家に行ったときのことです。祖父は虫めがねで一生懸命新聞を読んでいます。私は思い切って「そんなに無理して新聞を読まなくても今はテレビやネットで普通にニュースが見られるよ」と言いました。すると祖父は「テレビのニュースは難しいし、パソコンも使い慣れていないから」と苦笑いしながら答えてくれました。

このとき私はなるほどなと思いました。テレビやネットでさまざまなニュースが流れていますがどれも難しいというの私も祖父と同じ意見です。そこで新聞に興味をもつようになりました。それから毎日、新聞を読んでみることにしました。

——「難しい」——。漢字は見たことのない字が多く、内容が読み取れません。私は昔から本が好きで国語には自信がありました。が、新聞は事実だけをかいてあるので読むのに悪戦苦闘してしまいました。

しかし、それは初めの三、四日くらいでした。五日目に入ると難しい漢字がなんとなく読めるようになり新聞の内容が少しずつ分かってきました。そしてだんだん新聞のおもしろさも理解できるようになってきました。私の知らなかった地元の行事や出来事が詳しく書かれているので地元に着くようになりました。さらに一つの記事について自分の意見を持ち、それを家族と話すようになりました。今では家族とのコミュニケーションも増え、以前より考えに広がり生まれ強くなるようになりました。

しかし今、新聞の普及率はだんだん減ってきています。日本新聞協

会の調査データによると一世帯に対する新聞発行部数は二〇〇〇年には一・一三部でしたが、二〇一二年になると〇・八八部と一部を切ってしまう状態です。ただでさえ新聞を読む中学生は少ないです。それなのに読む機会、場所さえ減ってしまつては新聞を読まないまま大人になってしまふ人が増えてしまいます。

だから何だ、という人がいるかもしれません。今はデジタル社会だから新聞は必要ないと思つている人もいるでしょう。確かに今の世の中のネットの普及率は素晴らしいです。しかしネットでわざわざニュースを見る人は多いでしょうか。テレビはすばやく簡単に情報を得ることが出来ます。しかし、その得た情報すべてを理解することはできません。テレビなど、情報はボタン一つですぐに得られるのでついつい受け身になってしまいがちです。それに対し新聞は、自ら進んで読んでいかないとけません。この能動的な行動が、耳で聞き流すテレビとは違った深い理解につながります。

さらに私は新聞で活字ばなれをおさえることもできると思います。私も含めて今の中学生は活字を読むという習慣が少ないです。ここで手始めに新聞を読む、というのはどうでしょうか。最初は大変かもしれませんが。しかし、三、四日くらいたつと私のようにだんだん慣れてくると思います。

中学生にとつて新聞は難しい物かもしれませんが。しかし私達中学生は社会のことをよく知り、自分の意見をもつて現代社会に参加できるようになるべきです。私達のこれからの未来は予測不可能な出来事がどんどん増えていくと思います。原発問題、少子高齢化など「正解」がない中に自分の「答え」を出していかないとけません。そのため新聞は大切な「教科書」であり、私達に良い影響をあたえてくれるでしょう。

「アナタは新聞を読んでいますか？」





みなさんは、時間を大切にしていますか？中学生になり二年と五カ月。今、私は時間のたつ速さに驚いています。

時計の針は止めたり、巻き戻したりできるけれど、私の中学校生活はあと、七か月。待つてはくれません。兄の話によると、卒業までの一年はあつという間に過ぎ去つたというのです。その話を聞き、このままではいけないと思いはするものの、学校から出された課題も計画的にできない自分。友だちはという課題もこなし、部活動もしていました、友だちにできて自分にできないということは私自身に問題があるのです。また、母からは毎日のように

「苦手な教科は一日十分でもいいからやりなさい。」

と、口が酸っぱくなるほど言われても返事だけをし、テレビを優先させてしまう。気がついたらいつものまにか寝る時間になっていくという節度のない生活のくり返しでした。そして、そのことに何の疑問も抱かず、それが当たり前だと思つて自分がいきました。

そんなとき、私は家にあつた一冊の本と出会いました。渡辺和子さんが書いた「おかれた場所で咲きなさい」という本です。その中に「どんな場所におかれても、花を咲かせることを持ち続けよう。『現在』というかけがえのない時間を精いっぱい生きよう」という言葉がありました。私はこの言葉にはっとさせられました。読み進めていくと今の置かれた場所に不平不満をもつていても何もいいことはないということ、そして自分自身の気持ちの持ちようや行動を変えようと不思議と自分ばかりでなく周りもかわっていくということが書かれています。さらに、時間の使い方はそのまま命の使い方だと書かれています。それらの言葉が私の心にずっしりと残りました。それと同時に私は小学校四年生の時のことを思い出しました。その頃、私は食べ物の一切を受け付けることができなくなり、入院することになったのです。

私は毎日毎日長い時間、点滴のチューブにつながっていました。でも、私が病院にいる頃、友だちは外で遊び、多くの友だちを作り、私

の知らない体験をいっぱいしていました。世の中もまた、多くの事件が起こり、多くの出来事が時間とともに流れていきました。なのに、私の時間だけが止まってしまっていたのです。

世の中には多くの「差」があります。お金をたくさん持っている人とそうでない人。数学が得意な人とそうでない人……。でも、一つだけ誰でもが平等に与えられたものがあります。それは一日が二十四時間であるということです。「その日、その日をどう過ごすか」は個々で違います。

三年生という今、私にいちばん大切なことは『何事にも真剣に取り組む』ことです。そして何年かあと、自分の人生を振り返ったとき、「あのとき気がついて良かった。」「精いっぱい頑張った。』と言えるように、「今」の一秒一秒を大切に生きていこうと思います。





最近、私の身近なところで赤ちゃんが誕生しました。とても小さくて可愛らしく、抱っこをしながらたくさん話しかけていました。私はその子に対する愛情でいっぱいでした。私が抱っこをしているとき、赤ちゃんは安心して眠っていました。しかし、しばらくしてから下におろすと、今までぐっすり眠っていたのに急に泣き出してしまいました。初めのうちは気になりませんでした。何度も同じことがあったので疑問がわいてきました。どうして抱っこをしていないと泣いてしまうのだろうか。何か目に見えないものを感じとっているのだろうか。そう考えました。

そこで調べてみると、今から何百年も前にある国の王が行った実験の話が目にとまりました。目的は赤ちゃんはどうやって言葉を習得するのかということでした。赤ちゃんを二つのグループに分けて、一方の赤ちゃんにはたくさん話しかけ、他方の赤ちゃんには全く話しかけないという内容でした。基本的なお世話はずっと行いました。しかし結果を得る前に、栄養も清潔も満されていたのに、話しかけられなかった赤ちゃんは亡くなってしまったのです。私はこの話を知ったとき、欠けていることが、一つあることに気づきました。それは「コミュニケーション」です。

ある日の夕食のことです。いつものようにおいしい料理が並んでいて、私はパクパク食べていました。もちろん、それはおいしかったからです。けれどおなかいっぱい食べてから母に「おいしかったの？」と聞かれました。その時、私は気づきました。「おいしいよ」と言わずに、ただ食べていたことを。自分の中では行動で伝わっているだろうと思っていたのですが、実際には母に伝わっていませんでした。人は人と関わって生きています。その「コミュニケーション」は言葉で伝えること、そして行動で示すことで成り立っています。このどちらも欠けてはなりません。私はそのことを身をもって感じました。

私たちはコミュニケーションをとることで学校でも社会でも安心して、信頼を得ることができるのだと思います。友達とおしゃべりして

一緒に笑ったりすることは私にとってなくてはならないことですし、家族に学校での出来事を話すことも私にとってなくてはならないことです。話を聞いてくれる人がいる。そして話をしてくれる人がいる。このことは私にとっても幸せなことです。

そして、ただ関わっていくのではなく、相手の気持ちを考えていかなければなりません。なぜなら、人の気持ちや言葉は行動に表れてしまうからです。赤ちゃんが接したとき、愛情がなければ行動が雑になっていたのかもしれない。赤ちゃんは幼いながらも目に見えない「愛情」を感じとっていたのではないかと思います。私があやすと赤ちゃんは笑ってくれるし、話しかけると「あー」や「うー」といった言葉で答えてくれます。答えを返してくれることによって、更に愛情をもつて関わっていくという気持ちになります。こうしてコミュニケーションは成り立っていくのだと実感しました。

人と関わっていくことは生きていくうえでなくてはならないこと。その「関わっていくこと」は自分一人では成り立たない、つまり「コミュニケーション」は言い換えれば「助け合い」なのだと思えます。今後、より多くの人と関わることで自分自身、もっともって成長していきたいと思えます。



奨励賞 「生徒会長になって」

穴水町立穴水中学校 三年 米田 琴海



「生徒会長」それは、自分自身を変える大きなチャンスでした。

私は、人前で意見を出したり、みんなをまとめたりすることが苦手で、自分の意思をはっきりと伝えられない内気な性格でした。自分の思いと違っていても周りとおわせてしまい、もやもやが残ります。

ある時、生徒会の先生から、「執行部に入ることを考えてみたら。」と言われ、

「私にそんな仕事、出来るはずないし、関係ないわ。」と思っていました。

しかし、「琴なら出来るんじゃない、責任感強いし、みんなをまとめられるよ。」と友達から励まされるうちに、気持ちが変わっていき、母にも相談しました。「声をかけていただき感謝せんとだめやよ。先生は琴ならできると思ったから、言ってくれださったんじゃないが。自信もったら。」

母と友達の言葉が私の背中を押してくれました。

前期生徒会がスタート。最初は何をやっても不安なことばかり。前期のメンバーは、個性が強く、意見がバラバラ。それをまとめられない、自分に腹が立ち、投げ出したくなりました。しかし、時が経つにつれ、思いが通じ合い、「穴中が大好き、穴中を能登一番の学校にしよう」という仲間が増えていき、その思いが学年に学校に広がっていききました。

穴水中学校では毎年、牛乳パック、プルタブ、ペットボトルのキャップを集めて、地域の授産施設に寄付する「ボランティアレース」を行っています。今年は、例年を大きく上回る結果でした。また、毎年やっている「穴中タイム」というゲームをやめ、「いじめ問題」を取り上げ、全校生徒の意識調査から「どんなことがいじめだとおもいますか。」「みたこと、やったことありますか。」など五十項目のアンケートの実態を元に、全校集会で、生徒会からメッセージを送り、それにちなんだ絵本の読み聞かせもしました。

「いじめは絶対にさせない。しない学校、能登一番の優しい学校、楽しい学校にしよう」と呼びかけ、いろいろな活動をしてきました。その他、生徒会便りも毎週発行し、執行部の思いを伝え続け、すべてにやりがいを感じる毎日でした。

また、教育講演会で、たくさんの方と出会う機会があり、講師の方を会場へご案内したり、お見送りすることなど、お話しや体験の中から、将来に必要なことも学びました。

私はまだ、内気な自分の性格を克服できてはいませんが、困難なことに対しての不安はなくなりました。それは、じっくり考えれば必ず答えが見つかるし、仲間も助けてくれることを知ったからです。

そして、生徒会長になって学んだことは、私達はたくさんの人に支えられて生きている、周りの人への感謝の気持ちを忘れない。自信をもって進めば、何かが得られることを知りました。

やる前から諦める人がいます。以前の自分もそうでした。失敗してつらい思いをすることもありますが、挑戦して得た結果や喜びは、その何倍も大きなものです。

私は内気な性格から、常に挑戦する自分になりました。

生徒会長の仕事も残りわずか。そして中学生活もあと半年。卒業しても色々なことに、挑戦していきます。



奨励賞 『あたり前』にありがとう

金沢市立小将町中学校 三年 上田 瑠珠



「ただいま」って言ったたら「おかえり」って聞こえる。
「いただきます」って言ったたら、そこにはご飯とおかずが並んでいる。

これらのことは毎日当然のように私の生活の中にあります。あまりにもあたり前すぎて、それに対して特に何か思う訳でもなく、それこそあたり前のこととして毎日を過ごしていました。

二年生のときの夏。私はユネスコスクール中学生交流派遣事業に参加し、被災地の宮城県気仙沼市を訪れました。気仙沼市の中学生代表者会議に参加し、意見交換をして交流を深めました。震災を通して学んだことを一人ひとりが懸命に語りかけていました。どの意見も印象的で心に残るものばかりでした。

その中に、私の心を動かしたメッセージが二つありました。

一つは「あたり前じゃない、ありがとう。」震災前自分たちがあたり前のようにしてきたこと一つひとつにありがとうさを感じると、みんな口をそろえて言っていました。

もう一つは『つながり』を大切にすることです。たくさんの人に助けてもらったのは、たくさんの人とつながっていたおかげだということ人もいました。

もし、あの大地震が東北地方を襲っていなかったら今、日本はそして世界はもっとちがっていたのかもしれない。ともすれば個人主義に走りかけていた現代社会。しかし、震災を通して多くの人が絆の大切さや命の尊さ、助け合うことの意味などを学んだと私は思うのです。あの出来事をきっかけに気づかされたこと、見つけたもの、改めて感じたこと——。

被災した方だけではなく、日本中、そして世界中が助け合い一つになれたと思いませんか。今振り返ってみれば震災前の私は、自分の得するわがままばかりを言っていたような気がします。でも、自分のわがままの情けなさを知って私は、あたり前のことに感謝することの大切さを学ぶことができました。

東日本大震災では多くの人が犠牲になり、多くの人が悲しみにくれました。もう二度とこんな出来事はあつてはならないと思います。ただ、この震災を通して、人として生きていくなかで何よりも大切なことを学んだのも事実です。大好きな家族と過ごせる日々が幸せであることも、この震災を通して気づかされたことです。

今私達がやるべきこと。それは感謝の心を『言葉』で伝えることではないでしょうか。あたり前に過ごせることに感謝して、それをあなたの声と言葉で伝えてみませんか。たとえ耳が不自由でも手話というものがあります。「ありがとう。」たった五つの音に込められたその思いを伝えることは正直、とても照れくさいです。でもその思いが伝わったとき、なぜか、伝えた人も伝えられた人も心があたたまります。たった五文字を伝えるのはとても照れくさいけど、たった五文字を伝えれば誰かが幸せを感じるのです。

私は「今、自分にできること」「今、自分が生きていること」を大切にしたいと強く思います。五十分間しっかり授業をできること、友達とバカみたいに笑いあえること、部活動に熱中できること——。そんな何気ない日々の出来事に感謝できる人がもっとたくさんいてほしいです。自分の身に、いつ何が起こるかかわからないからこそ、あたり前にできること、そして家族や友達と過ごす何気ない日々を大切にしたいのです。

「ただいま」って言ったたら「おかえり」って聞こえる。

「いただきます」って言ったたら、そこにはご飯とおかずが並んでいる。

私はそれだけで十分幸せです。そんな何気ない毎日にあなたの声と言葉で伝えてみませんか。「ありがとう」って。





「もし、剣道していなかったら今ごろ何していたかなあ。」なんとなく頭に浮かんだことを口に出してみると、私って何で剣道始めたんだっけ、と思い返していました。

小学六年生から剣道を始めた私は、中学校でもまよわず剣道部に入部し、日々の練習で汗を流していました。

そんなある日、ふと皆は何で剣道を始めたんだろう、と思ったことがあります。そこで近くにいた先輩に「先輩は何で剣道を始めたんですか。」と聞いてみたことがあります。すると先輩から「なんとなくかな。」という言葉が返ってきました。その返事を聞いた時はなんていいかげんな答えなんだ、と思いました。しかし先輩は続けて「剣道していなかったらバドミントンしていたと思う。」と言いました。その時、とても不思議な気持ちになりました。もし先輩が「なんとなく」剣道を選んでいなかったら、先輩と剣を交えることもなかったかもしれない、そう思ったのです。

四字熟語に十人十色という言葉があるように私たちは好きなものも、やりたいことも異なります。そんな中で、こうして剣道を通して仲間になることができた、こんなに素晴らしいことがあるでしょうか。

入部したころは、先輩たちの背中を追いかけることで精一杯で、一年生のころの三年生との最後の大会では自分の無力さに涙を流したことを覚えています。そのくやしさを胸にたくさん練習した日々。過呼吸になるまで自分と戦った、かかり稽古。先輩に追いつきたくて、追い越したくて毎日必死でした。その成果からか、チームワークが磨かれ、団体戦では上位を競い合える実力にまで成長しました。私は剣道を通して技術だけではなく人としても成長することができたと思います。練習でも試合でも、つらくなった時私を支えてくれたのは剣道部の仲間でした。

私は以前まで団体戦での自分の次鋒というポジションがきらいでした。三年生なのに大将ではなく次鋒で試合に出ているということは、かつこ悪いことだと思っていました。でも今から思えば自分はまだまだ

だったと思います。「かつこ悪いポジションなんて一つもない」仲間からももらったその言葉が私の背中を押してくれました。私の役割は確実に一本を取ってくることに。自分のためじゃない、チームのために戦うんだ。自分のことばかり考えていた剣道が皆と勝利をつかむための剣道へ変わっていきました。そして迎えた三年生最後の夏。全中出場をかけた県大会では決勝戦まで勝ち進むことができました。あと一本で全中。しかしそのあと一本が取れず、全中出場という目標は達成できませんでした。残る大会は北信越。上にはつながりないけれど私にとっては最後の大会です。今までの感謝の気持ちを忘れずに戦おう。そう仲間と約束した北信越は三位に入賞しました。

偶然で集まった仲間たちが教えてくれたことは、目標に挑戦すること。私がここまで来れたのは、全中出場という目標と、支えてくれた仲間がいたからです。そして応援してくれたお父さん、お母さん、毎日真剣に教えてくださった先生には本当に感謝しています。

最後に剣道部の仲間。いつもどこかで支えてくれて、笑ったり、はげまし合ったり。部活動は私にとって最高の思い出です。今まで本当にありがとう。





僕の父は大層な雄弁家で、よくとんでもないホラ話をします。中でも農業にはいたく興味があるようで、「これからは農業の時代だぞ」なんてことを、まるで少年のように目を輝かせて言うのです。僕が工業系の高校に進みたい、と言った時も「農業もテクノロジーだらな」とか言っていました。いやいや、何言ってるんだか、とその時は思っていました。最近になっていや、どうやらホラ話という訳でもないらしいと分かってきたのです。

きっかけは大豆です。家で大豆を食べていると、袋に「遺伝子組み換えでない」とありました。聞いたこともないな、と思って調べてみると、どうやら植物のDNAをいじくることで、味を良くしたり、より強い作物にしたりできる、というのだそうです。米などに良く使われる品種改良に似ていますが、遺伝子組み換えのほうがより早く作れます。ただし、生態系に影響を与えるなどの問題があるとして、日本などではあまり好まれていません。

へえ、と思いました。今まで僕は、農業なんて泥まみれでやっているもの、というイメージがあったので、遺伝子レベルという最新技術を使っている姿が想像できなかったのです。

テレビなどでも、よく農業の話題が出ます。中でも目に付いたのは、「農業が工場でできるようになった」というものです。コンピュータなどで室温を管理し、水なども自動でやるそうです。日光の代わりにライトを使っていつでも野菜ができるのです。正直驚きました。今まで広大な土地と、たくさんの手間が必要だった農業が、工場の中でできるようになったのです。応用すれば、極寒の地や、灼熱の砂漠のような、とても農業は無理という所でも、野菜がつけられるようになるわけです。

これは革新的なことではないでしょうか。

皆さんは、今まで農業に対してどのようなイメージをもっていたのでしょうか。時代遅れ、田舎臭い…そんなことは全然ありません。むしろ、最新技術を使い、時代の最先端を行くのが農業というものなので

す。

ところで、皆さんは今の日本の農業がどうなっているか知っていますか？食料自給率というものがあります。これは要するに、国民が食べているものをどれだけ自分の国で作っているか、ということなのですが…日本は約四割。大変な数字です。食料の六割以上を外国に頼っているのです。これでは、いざという時日本が食料不足になりかねません。

そこで最新農業なのです。今も農業は、日進月歩で進化し続けています。将来的には、自分の食料は自分でつくる、が一般化するかもしれません。これは日本だけでなく、世界の食糧問題解決にもつながります。農業の進化は、人類の未来にもなるのです。

と、ここまで話してきましたが、僕自身も数か月前までは農業にはこれっぽっちも興味はありませんでした。父の話が無ければ、こんなこと考えもしなかったでしょう。農業は私達になくてはならないものなのに、その存在は忘れられがちです。こうしてその大切さに気付いて、話せて、感謝すらしています。

農業は、千年前も千年先も、常に私達のそばにあります。それを支えていくのは技術、そして人。これは忘れてはいけません。

仕事帰りの一杯を飲む時、今日の夕食を買う時、おかしをつまんでいる時。少し思い出してみて下さい。農業のこと、テクノロジーのことを。今だから、進化し続けているんです。





皆さんは日常でこんな会話をしたことがありますか。私は先日、友人から鉛筆を借りる際に「Aさん、鉛筆。」とだけ伝えました。単純な文章で頼み事をしたせいかわからない、言いたいことがはっきりと伝わらず、友人と会話が行き違ってしまったという思い込みをしてしまったのです。相手が理解してくれるだろうという思い込みをしてしまったのです。

最近流行しているSNSというコミュニケーションツールがあります。実際に話しているかのような感覚で使用でき、コミュニケーションは簡単になりました。手軽でわかりやすい表現の手段として沢山の人が使われています。ですが、便利ではあっても、私が「鉛筆。」とだけ伝えた時のように、多くの言葉を必要としなくなり、行き違ってしまうことが増えているのではないのでしょうか。相手の察知する力に頼りすぎてしまうと、自分の思ったことを正しく伝えられないのです。

実際に、近年叫ばれているのが日本人の国語力低下です。「全国都道府県教育庁協議会」によると、特に語彙力や自分の考えをまとめる力、監事を読む、書く力が低下している児童生徒が増えているそうです。それは私たちが日常の中で簡単な言葉でしかコミュニケーションしなくなり、自分から表現しなくなった結果ではないのでしょうか。自分の言いたいことが分かってもらえればそれで良いわけではありません。相手が伝えたいことのすべてを理解できるとは限りません。言葉とは内申の思いや感情、考えを表に出すためにあるのです。自分から表現ができなくては、相手に心の内をきちんと理解してもらえません。

古くからある日本語には、豊かで物事を表現するのに便利な言葉が多くあります。例えば、私たちの生活と密着している雨には、昔からそれにまつわる表現が多数残されています。小さな粒で弱く降っているのならば「小雨」、夏に突然降り出すのならば「夕立」など、一言に「雨」と言ってもどんな雨がいつどこに降るのか様々ありますし、昔の人はこれらの言葉を使い分けて豊かに表現してきたのです。多くの言葉を知っているとより相手に伝えることができ、豊かなコミュニケーションになります。このように日本語には自分の思いや伝えたい

ことを表現するための言葉が多く存在しています。ですが、いつの間にか、私達は相手が察知してくれるだろうと思いきみ、自分から表現することに言葉を使わなくなってきているのです。これでは、国語力が低下するとともに昔からの日本語もなくなってしまいうでしょう。

表現を豊かにするには語彙を増やさなければいけません。そのためには言葉に時間をかけることが必要です。先日、私はふと読んだ文章の中に気になる言葉を見つけました。

「彼はリーグ優勝に欠かせない重要な中継ぎ左腕(さわん)だ。」

左腕と書いて「さわん」と読ませる振り仮名は、私にとって見慣れないものでした。すぐに国語辞典を引いたところ、読みが「さわん」になることで、単に体の部位である左腕を示すのではなく、サウスポー、つまり左投げ投手そのものを指すそうだと分かりました。自分の見慣れない、聴きなれない言葉と出会い調べることによって、自分の語彙を広げることができそうです。時間をかけて言葉と向き合えばそれだけ語彙が身につくのです。

SNSなどの新しいツールを使いながら古くからの日本語を守る。今と昔が共存していくためには、私たちが手間をかけ言葉を実際に使っていないかなくてはいけません。言葉と向き合うことで、私たちの言語生活が豊かになり、より潤いのある人間社会が築かれることを願っています。





私の祖父は、山中漆器の仕事をしていました。山中漆器の生産工程には、木地、塗り、蒔絵があります。祖父は中でも、蒔絵を担当していました。漆器の表面に筆で絵や模様、文字などを描き、その上に金属粉を「撒く」ことで定着させる技法です。

この工程はとて大変であったと祖母から聞いています。使用する筆は何種類もあり、作品に合わせて違う筆を使用します。また、金粉や銀粉を撒くときは、極めて繊細な技術を必要とします。祖父は、約七年間も修業したそうです。そして、一つの作品を作り上げるとき、何日もの期間を要することもあったそうです。

祖父は、自分の作品をいくつか残しています。別所町の地区会館には、金箔が貼り付けられた看板があります。その看板は、祖父が作り上げたとき、私は驚きました。私はそんな祖父を誇りに思っています。しかし祖父は、私が二歳のときに亡くなってしまいました。

私は、祖父が仕事をしているところを見たことがなかったので気になり、山中町の工房で蒔絵の体験をしました。体験してみると、筆を入れるときの力加減や、曲線を描くところなどがとても難しいということがわかりました。実際に体験してみると、祖父をはじめとする職人さん達が、とても素晴らしい技術を持っていることを実感しました。

しかし、今、漆器業界は危機的状況にあります。昨年、輪島塗の有名な問屋が倒産したという記事が、新聞に大きく取り上げられました。実際、最近では山中漆器や輪島塗などの伝統工芸の売り上げが減少しています。その理由は、漆器が高価なために売れなくなってしまったのです。私たちにとって漆器とは高級なもので扱いが難しいというイメージがあります。そのため、日常生活で使用することに抵抗があり、漆器に対しての親しみが少しずつなくなっているような気がします。そうして、漆器のよさを知らない人たちが増え、漆器製品がますます売れなくなってしまうと思います。

さらに、日本はずいぶん前から、さまざまな海外の影響を受けてい

ます。海外のものが日本に入ってくるのは悪いことではありませんが、古来からの日本の伝統文化がそれに飲み込まれて消えてしまうのは、とても残念なことだと思います。

このまま漆器の文化がなくなってしまうてよいのでしょうか。そこで、漆器を後世に残していく方法を考えてみました。

例えば、これから大人になっていく子ども達に漆器のすばらしさを伝えるために、私が体験したような漆器作り教室に積極的に参加するよう呼びかけたり、簡単に作れる「漆器キット」のようなものを販売してはどうでしょうか。

他にも方法があります。漆は皆さんがご存じのように「JAPAN」と翻訳されます。つまり、漆器は日本固有の文化だと海外で認められているのです。そこで、いろんな国に漆器の専門店を置いてはどうでしょうか。漆器の良いところは、どれだけ時間がたっても、その美しさが衰えることなく、使えば使う程、美しさが増していくことです。そのようなことを、いろんな国の人々に知ってもらうべきです。また、観光客として日本を訪れるいろんな国の人たちに、漆器を使って食事してもらったりして、漆器に関心をもってもらおうという方法もあります。

私は、日本の伝統文化である漆器を、これからも残していく必要があると思います。そのためには、私たちが率先して動いていくべきではないでしょうか。そして、祖父が守ろうとした伝統文化を、私たちが守っていくべきだと思います。





差別とは、『扱い方に差をつけたり、不当なわけへだてをしたりすること。』

辞書にはこう記載されています。差別とは決して正しいことではなく容認できることではないのです。私はこの社会から差別がなくなっ
てほしいと強く願っています。私がこう思うきっかけになったことが
二つあります。

一つめは、社会の時間に「人権」について学んだことです。「人権」とは人間が無条件にもっているはずの権利、たとえば生命や自由が保護される権利です。ところがこれが様々な差別によって侵されているのは悲しむべき現実として世界中にあります。

二つめは、私が身近に体験した差別のことです。私には妹が二人いて、二つちがいの一人目の妹には障害があります。一才半検診の時に初めて知的障害だと分かったのです。私は幼いころは妹の障害をはっきり理解していませんでした。ただ、うまく人とコミュニケーションがとれないなど周りのみんなとは何か違うと思っていました。小学校に入ってから、妹のことでもたくさん辛い思いをしました。教室でさわいだ妹への不満をぶつけてくる人やあからさまに妹の悪口をいう人もいました。その度に妹のことを嫌になる自分がいました。そして「みんなの前ではずかしいことしん」といって。「なんであんなにかおるん。」というような言葉を何度も妹にあびせました。それを聞いた母は悲しみ、そして私を激しく叱りました。でも、その時の私は母の気持ちより自分が優先でした。そんなとき私は妹の入っている特別支援学級の先生にこんなことを言われました。

「君が守ってあげないで、誰があの子を守るんだ？ 本当につらいのはあの子自身だよ。」

その言葉を聞いて、今まで妹を助けてあげなかった自分がすごく恥ずかしくなりました。

それからは妹のことで何を言われてもこの言葉を思い出し、妹が困っているときは手助けできるようにになりました。やっと姉として妹に向き合うことができるようになってきたのです。妹の先生が言われるよ

うに、本当に辛いのは差別された人です。みんなと少し違うだけで差別することはあつてはなりません。大切な人権を侵されてはいけません。

では差別をなくすにはどうしたらいいのでしょうか？ 私は二つのことが大切だと思います。一つめは、人種や性別などが違うからと言ってわけへだてるのではなく、それを個性だと思ふことです。それによって自分にはないものが見えてきて毎日がもつと楽しくなると思っています。二つめは、障害をもった方への悪い思い込みをなくすことです。『障碍者』と聞くと悪いイメージが浮かぶのですが、それは間違っています。障害をもっている方たちはとても優しいし、他の人よりもとびぬけて上手なことがあったりします。私の妹は、私よりも漢字が得意で機械の操作を覚えるのもとても速いです。このことをもつとたくさんの人に知ってもらい障害をもっている方への差別をなくしてほしいです。私は自分と少し違う人とふれあうことは大切だと思います。そうすることで新しい発見や学びがあるのです。そして、お互いに成長することができると信じています。私自身も妹と接している内に妹の前向きな姿や誰に対しても公平に接することができる姿を見て、

「こんな人になりたい。」と思うようになりました。これは私の周りの友達に対しても感じる気持ちです。相手に障害があつてもなくても自分と違う人と接することは新しい自分を見つけることにもつながるのです。差別をする前にこのことをよく考えてほしいです。そうしたらきっと、みんなで助け合い共に生きていくことができると思います。この世界から差別なんて消えて毎日みんなが笑顔で過ごせたらどれだけ楽しいでしょう。お互いの違いを認め合い理解することはその夢に向けての第一歩だと思います。



中学生らしく新鮮で、そして大変素晴らしい主張をしてくれた十六名の皆さん、本当にありがとうございました。

ものの見方や感じ方、自分自身を見つめる力が段々と深まっていく中学生時代に、身の周りや世の中で起こった出来事を問題意識をもって捉え、自分なりの答えを出し、それを表現することはとても大切なことです。

皆さんは、今日の県大会に来るまでに、心に感じたことを、自分なりの分かりやすい表現にしようと、伝える意図を明確にし、話しの構成や表現を工夫するとともに、聞く人の共感が得られるよう何度も読みあげる練習をしてきたことと思います。

そのため、いずれの発表もその人らしい目線で、考えたことが豊かに分かりやすく表現され、語る姿も中学生らしくのびやかで、まさに「少年の主張」にふさわしいものでした。

この大会が全国大会の予選を兼ねていることから、結果として、最優秀賞、優秀賞、奨励賞を決めなくてはいけませんでしたが、その差はほんの僅かであり、賞の如何より、まずは皆さんのここまでの努力と思いの深さに敬意を表します。

主張大会において、皆さんは、普段の生活の中で見付けた様々なテーマを取り上げて発表してくれました。

・「今あることや生きていることに感謝すること」「自分の視野を広げること」「今を大切に、自信を持って行動すること」など、自分をさらに高めようとする内容

・「人との関わりや仲間を大切にすること」「周りの人への思いやりの気持ちを持つこと」など、他の人とともにより良く生きようとする内容

・「公正で差別のない社会の実現」「伝統文化や言語文化を大切にすること」「異文化理解や最新技術の意義」

など、より良い社会の実現を目指そうとする内容など、皆さん自身が気が付いたことや感じたことを、自分の言葉で実感を持って語っており、何をどのように考えているのかが本当に良く伝わってきました。

今、学校では、「他を思いやる心や感動する心」、「様々な問題に積極的に対応し、解決する力」など、より良く生き抜く力を育くむことを大切にしています。

皆さんは、今日、日頃身に付けてきたこれらの力を生かし、堂々と発表されました。また、他の発表にも耳を傾け、共感する点多かったと思います。この「少年の主張」を通して感じたことや学びあったことが貴重な財産となり、未来の目標の実現に役立つことを期待しています。

参加された皆さんや支えたいいただいた先生やご家族の方々、この大会の関係の方々に心より感謝申し上げます、講評といたします。

平成25年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会

4 日 時

平成25年9月28日（土）午後1時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町 212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容（日本語で発表すること）

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や提言など。

以上のうち、考えていることや感じていることを自由な発想と、飾り気のない言葉でまとめたもの。

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名
優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

9 その他

- (1) 発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、最優秀賞受賞作品はポスターにし、学校、関係機関等へ配付する。県ホームページにも掲載する。
- (2) 最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 若者らしく新鮮で意欲的な主張であるか
- イ 主張の内容が明確で、論旨が一貫しているか
- ウ 主張の内容が共感と感動を与えるか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすいか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があるか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えるか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であるか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持時間を5分とし、持時間を超過した場合はその時間の長さに応じて減点をする。(5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。)

審 査 委 員

(1) 審査委員長 川 上 隆 夫 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 下 出 博 明 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

細 川 ふじみ (石川県PTA連合会 副会長)

牧 野 哲 栄 (石川県少年団体協議会 副会長)

宮 本 浩 一 (石川県小中学校長会 理事)

中 田 一 宏 (石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第32回 加賀地区中生意見発表大会」

主催 加賀地区市町教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 平成25年8月31日（土）13:30～

会場 能美市根上総合文化会館

審査員 崎山 由樹夫（石川県教育委員会小松教育事務所長）

坂本 和哉（加南地区教育委員会連絡協議会会長）

新川 淑恵（能美市学校教育研究会長）

本多 他家志（能美市立図書館長）

発表者（16名）

演題	中学校名	学年	氏名
目に見えないこと	加賀市立錦城中学校	3	村井 理紗
“働く”ということ	能美市立辰口中学校	2	戸井 雅斗
いじめのない社会へ	加賀市立橋立中学校	3	横山 璃佳
友だちの大切さ	能美市立寺井中学校	2	中川 りか
チェンジ ～僕の決意～	小松市立丸内中学校	2	尾上 天馬
「危機言語」から見えてきたもの	能美市立根上中学校	2	中山 みほ
助け合い・支え合い	加賀市立東和中学校	3	米口 悠生
自分が持つてる運と努力	川北町立川北中学校	2	寺岡 孝将
父の単身赴任を通して	能美市立寺井中学校	3	金谷 美佳
私を変えるきっかけ	能美市立根上中学校	3	高畑 明由
人に優しく	加賀市立山中中学校	1	前川 小梅
実行する勇気	小松市立芦城中学校	2	水口 菜々
命の大切さ	川北町立川北中学校	3	辻原 亜実
祖父の残してくれたもの ～伝統を受け継ぐことの大切さ～	加賀市立山代中学校	3	空 達也
国際交流から学んだ心	能美市立辰口中学校	3	北本 紫乃
「言葉」というもの	加賀市立片山津中学校	3	河崎 聖怜

(2) 金沢市地区大会（金沢市）

第66回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 平成25年9月1日（日）9：00～

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 二見和男 NHK金沢放送局アナウンサー

市内中学校国語科担当教諭

発表者（27名）

演題	中学校名	学年	氏名
他人の気持ち	金沢市立高尾台中学校	3	佐藤 絢香
便利の裏に	金沢市立城南中学校	3	野崎 藍里
家族がいて私がいる	金沢市立金石中学校	3	砺波 瑠璃
汗のしみたお米	金沢市立北鳴中学校	3	清造 千華
かけがえのないもの	金沢市立浅野川中学校	3	上野 瑞季
重なるバベルの塔	金沢市立森本中学校	3	西尾 すみれ
感謝	金沢市立犀生中学校	3	山澤 武真
現在の福祉について	金沢市立泉中学校	3	森岡 未来
情報社会に生きる私たちにとって大切なこと	金沢市立野田中学校	3	小坂 鷹生
今、大切なもの	金沢市立額中学校	3	水上 恵理
言葉と向き合う	金沢市立鳴和中学校	3	宮本 由季
伝統と今を生きる私達	金沢大学附属中学校	3	鈴木 理子
『あたり前』にありがとう	金沢市立小将町中学校	3	上田 瑤珠
みんなちがってみんないい？	金沢市立紫錦台中学校	3	村井 櫻子
震災を経て	金沢市立港中学校	3	坂田 絢香
「アナタは新聞を読んでいますか？」	県立金沢錦丘中学校	3	樋田 みち瑠
私たちにできること	金沢市立高岡中学校	3	河津 史織
被災地の願い	金沢市立芝原中学校	3	上梨 美咲
伝統芸能の少子高齢化	金沢市立西南部中学校	3	水江 香月
将来の夢～今の自分～	金沢市立内川中学校	3	小山 陽平
支え、そして支えられること	北陸学院中学校	3	八木 千穂
誰かを想う 誰かに想われる	金沢市立兼六中学校	3	富田 睦見
私の目標、そして、夢へ	金沢市立医王山中学校	3	松本 紗采
3つの大切を忘れない	金沢市立長田中学校	3	長田 真奈
自分の思いを…	金沢市立緑中学校	3	北畑 玲奈
夢の種	金沢市立緑中学校	3	島谷 奈那
「差別」に思う	金沢市立清泉中学校	3	中田 亜莉紗

(3) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第45回全能登私の主張発表大会」

主催 第45回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 平成25年9月8日（日）9：00～

会場 七尾サンライフプラザ大ホール

審査員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）

荒巻 幸子（石川県教育委員会中能登教育事務所指導課長）

渡辺 芳昭（七尾市教育委員会子ども教育課学校教育課長）

中村 洋子（七尾市小中学校校長会代表）

津田 義友（七尾市小中学校校長会代表）

発表者（9名）

演題	中学校名	学年	氏名
「言う」と「言わない」の間で	七尾市立田鶴浜中学校	3	森田 美悠
魔法のおばさん	七尾市立七尾東部中学校	3	石崎 陽和
自分にできること	七尾市立中島中学校	3	松本 美穂
生徒会長になって	穴水町立穴水中学校	3	米田 琴海
偶然がくれた宝物	七尾市立御祓中学校	3	田畑 佳穂
Dear my father and every one	七尾市立七尾東部中学校	3	平山 夏帆
感謝	七尾市立朝日中学校	3	荒山流樹也
生きていくために	七尾市立御祓中学校	3	安原 菜夏
家族の絆	七尾市立能登香島中学校	3	竹内麻佑子

(4) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第23回 (平成25年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 白山市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 平成25年9月8日 (日) 13:30～

会場 白山市民交流センター

審査員 橋本 外志 (白山市教育委員会 教育委員)

野川 徹 (河北郡市小中校長会 (石川県小中学校長会副会長))

高松 宏晃 (石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事)

古本 達明 (白山市PTA連合会 副会長)

岡 喜勝 (石川県青少年育成アドバイザー協会)

発表者 (17名)

演題	中学校名	学年	氏名
大切な命	白山市立笠間中学校	2	番下 輝也
「身障」と言わないで	野々市市立野々市中学校	2	小林 真理子
今を大切に生きたい	白山市立鳥越中学校	3	中西 夏菜
農業テクノロジー	かほく市立宇ノ気中学校	3	森 幹太
母の涙	白山市立光野中学校	3	山本 夢
国際交流に必要なもの	かほく市立高松中学校	3	青崎 茉奈
助け合うこと	白山市立鶴来中学校	3	大谷 萌
私という人間	かほく市立河北台中学校	3	新甫 咲
敬語もどき	かほく市立宇ノ気中学校	3	村谷 早織
悲しみを喜びに	白山市立北辰中学校	3	白藤 利典
生まれてきた意味	白山市立松任中学校	3	上瀧 美夏
46秒	野々市市立野々市中学校	3	木村 太亮
名のる	野々市市立布水中学校	3	朴 相琥
失って気付いたこと	白山市立鶴来中学校	3	京堂あずみ
アルバムから	白山市立光野中学校	3	松尾 菜子
私の生きている意味	津幡町立津幡南中学校	3	中嶋 梨乃
時間の価値	白山市立北辰中学校	3	篠原 沙良
私はいじめを止める勇者になりたい	内灘町立内灘中学校	3	槌谷真美子

忘れないために

宮城県 気仙沼市立小原木中学校 三年 梶川 裕登

皆さんは、以前の気仙沼の街並みを思い出せますか。僕は、はっきりと思い出すことができません。今の景色を以前からあった景色として錯覚してしまっているのです。

それに気付いたのは、小原木中学校での活動からでした。

小原木中学校では、海拔表示プロジェクトを行っています。その場所が、海拔何Mなのかを調べ、電柱など見えるところに、このような表示板を取り付けていきます。海拔を意識し、どの高さまで逃げればよいのか、参考にしてもらおうと、考えたプロジェクトです。

調べてみると、小原木中学校は海拔七〇M。気仙沼高校は、四〇・五M。市立病院は一三・八M。船着き場は〇・八Mでした。僕が住む只越地区の津波の最大値は二七・六M。海拔五・二Mしかなかった僕の家は、残念ながら、もうありません。

僕達はまず、表示板を中学校のある館地区に取り付けました。この地区は、ほとんど海拔二〇M以上で、被害の少なかった場所です。次にとなりの大沢地区への取り付け。ここは海と少し離れていても多くが海拔二M程度で大きな被害のあった地区です。取り付け作業の中で、僕は、変わり果てたこの地区の姿を見ながら、言いようのない不思議な感覚に襲われていきました。それは、草が生い茂る、何もなくなつたこの景色を見ても、全く違和感を感じなくなっているのです。それどころか今の景色にすっかり慣れてしまった自分がそこにいるのです。あたかもこの景色は、僕が生まれる前からずっとこうだったんだと。いや、それは違う。こんな姿ではない。ここには僕の友達の家があつて、漁港から見える海は、もう少し遠く、低くて、コンビニはここにはなかった。かつて過ごしてきた風景が、僕の頭の中から薄れていつてしまう。取り付けをしながら、何が以前で何が今なのか、何が変わって何が変わっていないのか。

その後、何かに誘われるように、かつての自分の家があつた場所に、行って見ました。今残っているのはコンクリートの土台だけ。ここで生活の営みがあつたなんてこれっぽっちも感じられません。でも、こ

の景色にも何の違和感を感じない自分がそこに立っていました。ここには、皆で笑つた家があつたはず。地域があつたはず。そして、笑顔のおじいさんがいたはず。でも、もう……震災から二年あまりしか経っていないのに、十年以上も暮らした環境を、感覚を、失いつつある自分がいたのです。僕を今まで育ててくれた、この温かな場所を心の片隅から消しきってしまうのかと、自分自身がとても怖くなりました。人は忘れてしまうもの。慣れてしまうもの。悲しみの中にいつまでもいてはいけない。切り替えて前に進まなくてはいけない。辛いけど、震災があつたことを、そこに町があつたことを、僕たちは忘れず、伝えていかななくてはならないと、思うのです。

「忘れないために」その一つの手立てが、海拔表示プロジェクト。地域を回り、そして伝える。

僕は、これからも、ここにどんな人達が住んでいたのか、どんな町があつたのか、そして震災で、どんな被害を受けたのかをしっかりと後世に伝えていきたいと思っています。それが、海と一緒に生活していく僕たちの役目だと思っっているから。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化局県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) [検索](#)

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています